本拠地・山口を「西の京」と称え合った大内氏物語

大内氏の勃興、繁栄そして突然の滅亡　なぜ？　なぜ？

（歴史には色々な見方が有りますので、批判的なご意見を歓迎）

2023年07月27日（木）　HYS

周防大内氏とは？　ざっくりと言えば

- 本姓は多々良氏。百済の聖王（聖明王）の第３王子の後胤と称した。（15世紀後半からの自称。真偽不明で疑問符が多い）
- 平安末期以降、国府の周防権介（ごんのすけ）を世襲した在庁官人。鎌倉時代以降周防国衙在庁を支配。周防の支配者。
- 南北朝の内乱時、防長二ヶ国の守護大名になる。
- その後、力を増し、西国一の勢力となり、一時は将軍家や細川家と勢力を競う。
- 周防・長門・石見・豊前・筑前各国の守護職に補任されたほか、大内義隆の代には山陽・山陰・北九州の６か国を実効支配（この代で大内は滅亡）

山口　大内館　マピオン

常栄寺
初瀬団地
初瀬観音
俊龍寺
七尾台
瑠璃光寺
五重塔
香山公園
法泉寺
木町橋
洞春寺
豊栄神社
陸上自衛隊山口駐屯地
上竪小路
鴻ノ峰
山口県庁
県庁東門
築山跡
野田
山口自衛隊前
山口赤十字病院
金古曽
高嶺城跡
鴻ノ峰公園
大内氏館跡
日赤入口
歴史民俗資料館
後河原
大殿小
上山口
善生寺
春日町
山口図書館
竪小路
山口大附属山口小
亀山公園
白石三丁目
白石
古熊神社
山口県庁
中市局
大殿中
白石中
山口中央局
米屋町
山口高

大内氏館跡（現在龍福寺）

戦国大名の如き石垣等は無い

大内氏館跡

八坂神社

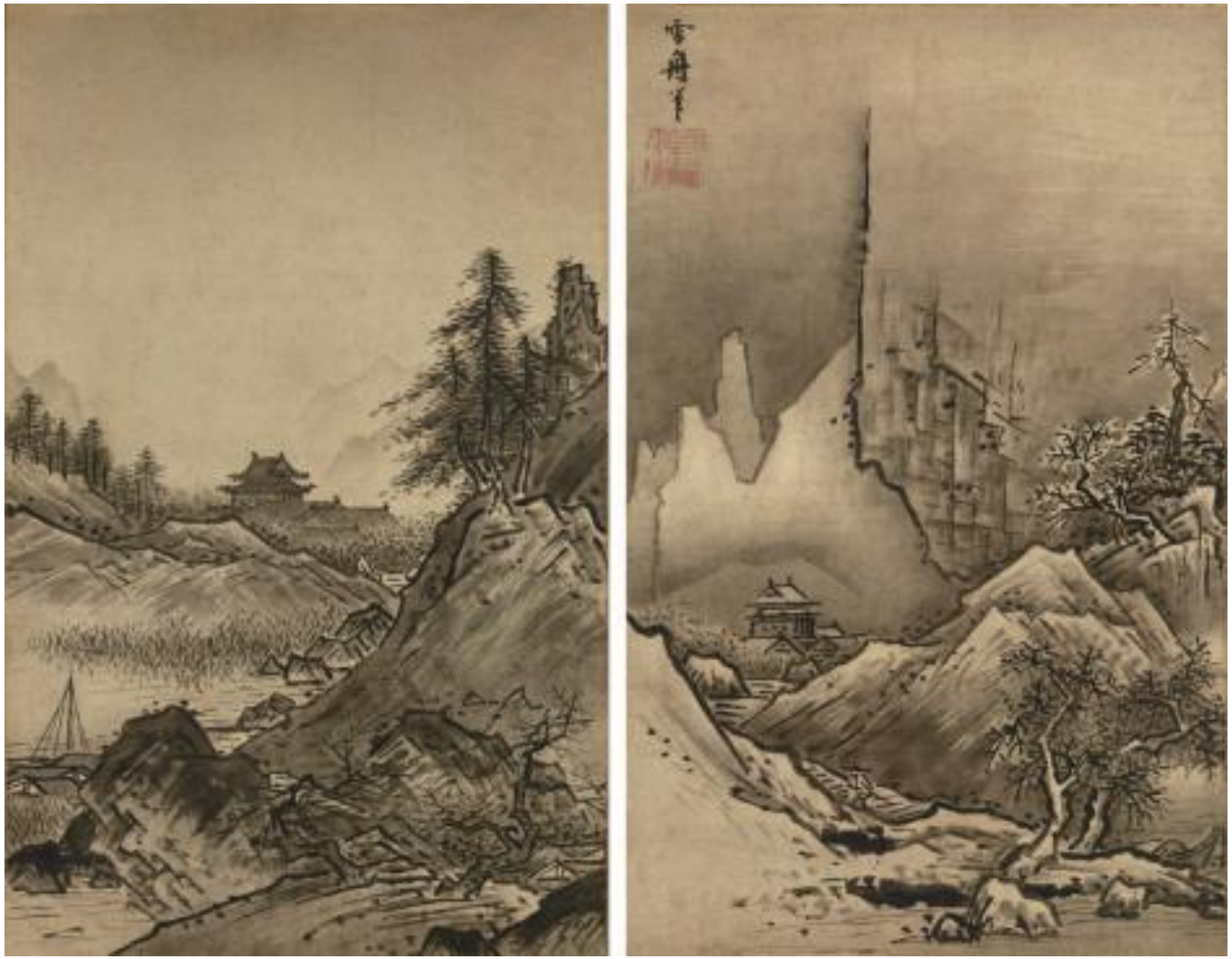
（重要文化財）大内弘世が1369年に京都から勧請

瑠璃光寺五重塔

山口の基礎を築いた大内義弘（応永の乱で敗死）を弔うため
1442年に建てられた。

秋冬山水図（国宝）：　雪舟

備中で1442年生まれ。1454年周防に移り、大内教弘の庇護をうける。
1467年遣明船で明に⇨1469年帰国。　周防や石見で創作。1506年没（益田）



常栄寺雪舟庭（1470年頃、別荘として築庭させる）

大内政弘が室町中期に雪舟に命じて作庭

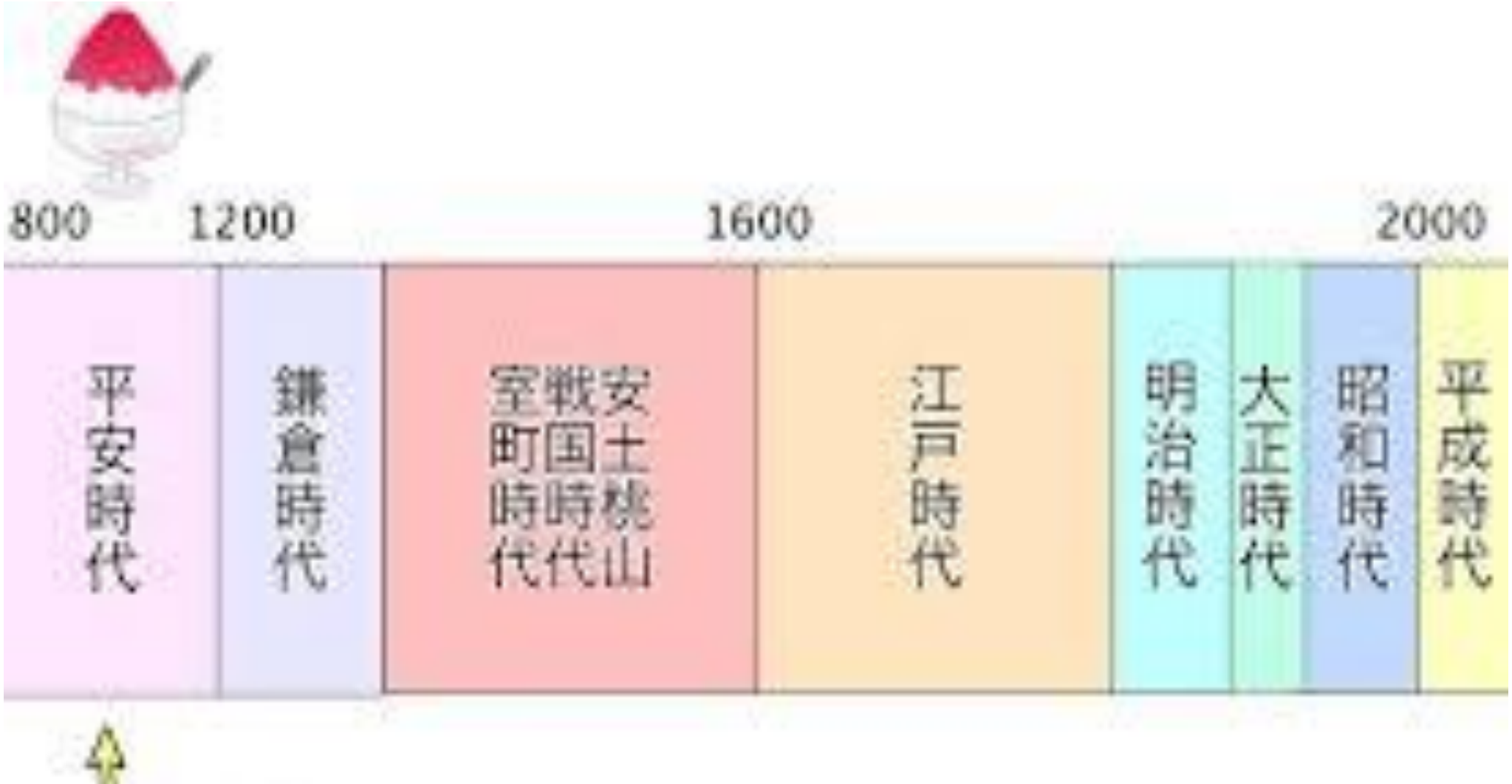
ザビエル記念聖堂

1551年大内義隆に会い、その庇護を受けて布教。ザビエル来訪400年を記念して1951年に建てられた。その後焼失・再建。

大内塗

大内義隆が、朝鮮や明国との交易品として奨励したと伝わる漆器（西洋人の評価が高く JAPAN と呼ばれた）

時代を見る


800
1200
1600
2000
平安時代
鎌倉時代
室町時代
戦国時代
安土桃山
江戸時代
明治時代
大正時代
昭和時代
平成時代

周防と東大寺の関わり　○

- 聖武天皇と光明皇后により大仏造立の詔が発せられ、難工事の末、大仏開眼会（かいげんえ）が天竺出身の僧を導師として挙行（天平勝宝4年　752年）

　当時の日本の60余か国に建立させた国分寺の中心をなす「総国分寺」と位置づけ　　大仏造立・大仏殿建立のような大規模な建設工事は、国費を浪費させ日本の財政事情を悪化させるという現実を突き付けた。

- 治承4年（1181年）平重衡（しげひら：　清盛の五男）による南都焼討の兵火で壊滅的な打撃を受ける。
- 朝廷・幕府の力を背景にして造営料国に充てられる。　大勧進職：重源
- 1195年には再建大仏殿が完成。　源頼朝らの列席の元、落慶法要。

　　平家が焼いた大仏殿、鎌倉権勢を示す為にも重要。

- CF:　歌舞伎18番『勧進帳』　安宅の関

大仏と周防・長門の関わり合い　△

- 長登（ながのぼり）銅山：　長登銅山は山口県美祢市の秋吉台南東に隣接する銅鉱山である。長登銅山では7世紀末ないし8世紀初頭から銅と鉛を中心とした鉱物の採掘が始まり、特に奈良時代には東大寺の大仏に使われた銅の産地であった可能性が高い。
- 鋳銭司（じゅせんし・ちゅうせんし）：古代日本に置かれた令外官の一つ。銭貨鋳造をつかさどった。819年から825年には「**鋳銭使**」が長門国におかれ長門国司の職務を兼ねた。その後、周防に「**鋳銭司**」を配置。

- 銅の精錬技術に精通した渡来系氏族との関係があるのかも？

平安末期から鎌倉時代の大内氏　○

- 国衙を取り仕切る周防権介（ごんのすけ）（例　大内弘盛）
- 防長の地頭が東大寺再建（大勧進職）を邪魔
- 在庁官人で国衙を取り仕切るべき大内氏は地頭に同調的
- 重源は摂政に窮状を訴える。

　　⇒　幕府は大内は御家人ではないと訴えを退ける

- （守護・地頭：　源頼朝によって設置された。表向きは義経追討のためと言う理由にして、後白河法皇の了解を得た。守護・地頭は年貢を徴収する権限をもった。）

（南北朝の内乱で）大内弘世が守護職就任　○

- 観応の擾乱で北朝が二つに割れた機会に宗家の大内弘世は南朝に帰順して周防守護に任じられ、鷲頭（わしず）氏を滅ぼす。更に長門守護の厚東氏を九州に追う。
- 貞治元年（1362年）弘世は足利尊氏の働きかけで、北朝方に転じ、防長二ヶ国の守護に。
- （日本の南北朝時代：1336年（延元1・建武3）足利尊氏が北朝の光明天皇を擁立し，それについで後醍醐天皇が吉野に移り南朝を開いた時期をその始期とする）

大内氏／略系図

琳聖…正恒―藤根―宗範―茂村―保盛―弘真―貞長―貞成―盛房

弘盛―満盛―弘成―弘貞―弘家―重弘―弘幸

弘世―義弘―持世

盛見―教弘―政弘―義興―義隆＝義長

弘茂

周防・長門の大きな流れ（I）

- 平安時代末期：平氏の勢力圏　彦島に拠点
- 壇ノ浦で平氏滅亡：　鎌倉御家人　佐々木高綱（守護）があてられる。
- 平重衡に焼き討ちされた東大寺再建のために造営料国に充てられる：
  重源　ちょうげん（東大寺大勧進職しき）
- 二度の蒙古襲来：　弘安の役前、元の使者が長門に上陸「長門警固番役」
  北条一門が「長門探題」
- 鎌倉幕府滅亡後：　周防の在庁官人筆頭（権介）として防長の主役に大内氏が躍りでた。
- 大内弘世：　実力で防長を支配下に、北朝から両国の守護に任じられた（本拠地を防府から風水的に良い山口に移す）　南北朝時代
- 大内義弘：明徳の乱（幕府に反旗を掲げた有力守護大名：山名氏を叩く）の軍功、　南北朝統一への貢献　⇨
- 　周防・長門・石見・　豊前・紀伊・和泉の六か国の太守へ
- 応永の乱で大内義弘は足利義満に反乱を起こして滅ぼされる　⇨
  盛見や持世が回復　　支配地は筑前国博多の掌握　対外貿易の拡大

周防・長門の大きな流れ（II）

- 応仁・文明の乱　【応仁元(1467)年から文明9(1477)年までの11年間】で西軍の山名宗全の要請を受け**大内政弘**は二千艘の兵船、軍勢で参加、西軍の主力を担う巨大な軍事力：　西日本一の大大名　京に長期帯陣
- 大内道頓の反乱：　政弘の叔父で、細川勝元と通じ、留守を狙い挙兵
  周防守護代の陶弘守は政弘不在にかこつけ大内宗家を乗っ取るなど出来ぬと拒絶
  益田貞兼と道頓を討つ

- 大内政弘は山名宗全と共に西軍を支える
- 乱の終結で領国支配に乗り出す
- 　　現地支配を行う守護代・郡代を配置　『大内家壁書』という分国法を制定
- 幕府は明応の政変で解体の危機　⇨　将軍・足利義稙は大内義興を頼る
- 義興は義稙（よしたね）を擁立し上洛。　管領代として約10年支える
  管領という役職は足利氏一門の細川・斯波（しば）・畠山の三家が務める

周防・長門の大きな流れ（III）

- 大内政弘の子、大内義興は将軍の後見人で、周防・長門・石見・安芸・筑前・豊前・山城の7ヶ国の守護職を兼ねた
- 大内氏館を中心に城下町を形成。　京からは多くの公家や文化人が来訪
- 　　文化興隆：　文化は京都に匹敵
- 日明貿易に関わる

- 大内義隆：　尼子氏が勃興　第一次富田月山城の戦いで大敗
- 義隆、政治に興味を無くす。　家臣分裂
- 家臣の陶晴賢と対決し大寧寺の変で実質的に滅亡
- 陶晴賢は毛利元就に敗れる（厳島の合戦）

大内氏の始祖

- 百済の「琳聖太子」だったと称した。
- 『大内多々良氏譜牒（大内政弘 1486年）』大内氏が後世になって主張した（14世紀以降）もので事実とは考え難い。

- 百済王の血統を誇示して自家を権威付け？

大内氏の関わる大きな戦い

- 1399年：　応永の乱　大内義弘が勢力を強めたために将軍・足利義満に睨まれ義弘は討たれる
- 1467年～1477年：　応仁の乱　きっかけは幕府管領家の畠山氏と斯波氏それぞれの家督争いに端を発し幕府中心の細川勝元と山名宗全の2大有力守護大名の対立を生み、幕府を東西に分ける大乱となった。
- 1470年：　大内道頓の反乱　大内政弘が京に帯陣のおり、身内が反乱
- 1523年：　寧波の乱　　大内と細川が遣明船の入明に際し寧波で戦う
- 1543年：　第一次月山富田城の戦い：大内氏が尼子氏を攻める　（大内側敗戦）
- 1551年：　大寧寺の変：　陶晴賢が西国随一の戦国大名とまで称されていた大内義隆を攻め義隆が自害させられた政変。
- 1555年：　厳島の戦い　（毛利元就が陶晴賢を討つ）
- 1582年：　本能寺の変　⇒　豊臣秀吉　天下平定
- 1600年：　関ヶ原の戦い

応永の乱　(I)

- 大内義弘が勢力を強めたために将軍・足利義満に睨まれ義弘は討たれる

（**大内義弘**は６ヵ国の守護を兼ね，朝鮮貿易で富をたくわえ，守護大名中最大の勢力を誇っていた。大内家、最盛期のひとつ）

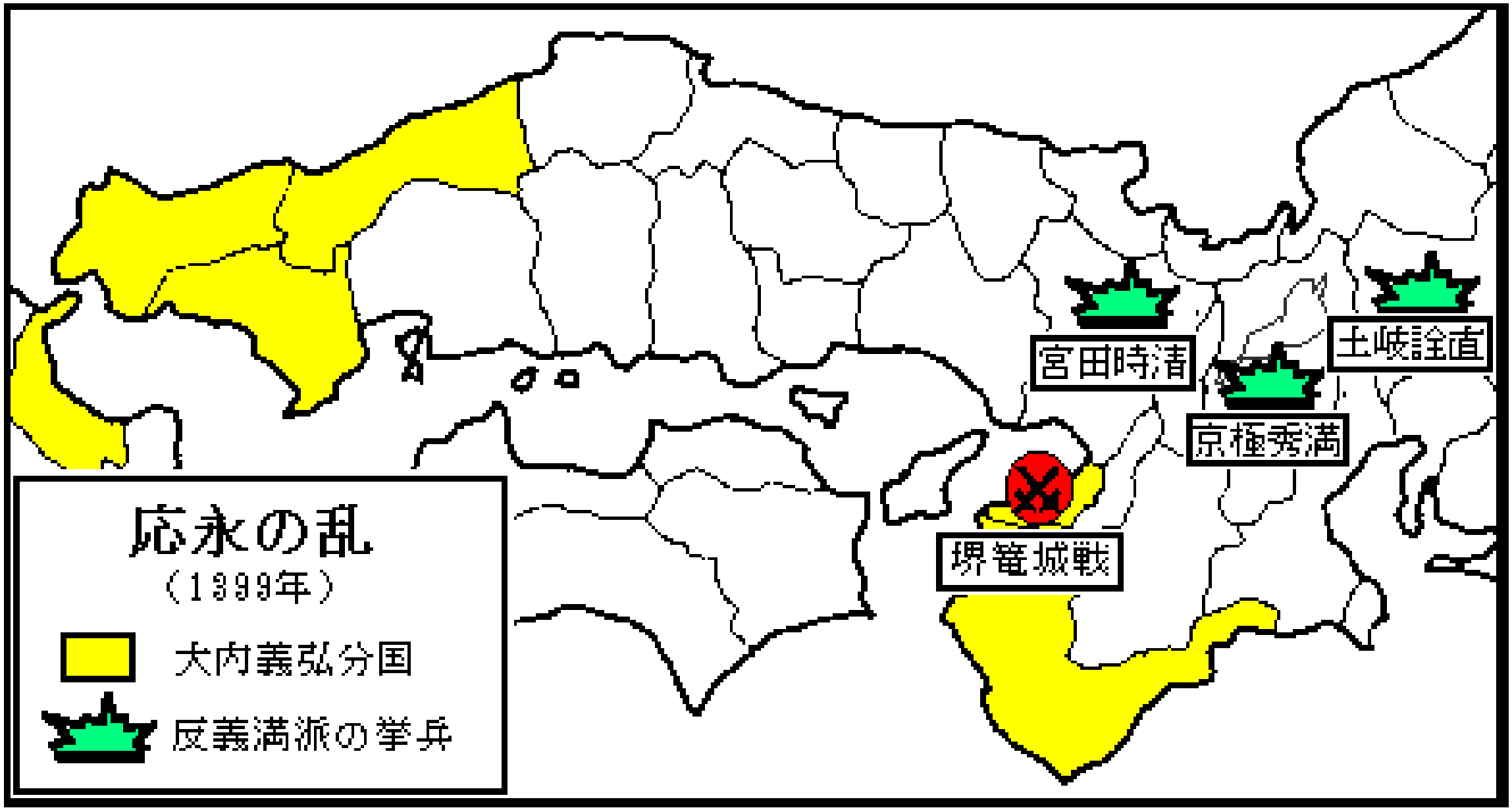
経緯

- (1)当時の室町幕府と将軍は勢力の強い守護大名の連合に擁立されていました。
- (2)将軍・足利義満は守護大名が勢力を増すことを恐れており、守護大名が勢力を増すことや既に大きな勢力を持っていた守護大名が減退するように様々な策を講じた
- (3)「六分の一殿」と呼ばれるどの勢力を誇っていた山名氏も足利義満によって勢力が減退されてしまった守護大名の一つ（明徳の乱：「**山名満幸**」が幕府に反乱）。
- (4) 山名氏を事実上制圧した足利義満にとって次に恐れを抱いていたのが守護大名・大内義弘でした。
- (5)何とかして大内義弘を失脚させたいと考えた足利義満は大内義弘に現在の金閣寺の造営に関する土木工事を命じます。

応永の乱（II）

- (6)戦に長け戦で将軍に仕えてきたという自負があった大内義弘はこの工事を断ります。　⇨　両者の緊張が高まる
- (7)九州における少弐氏（しょうにし）や菊地氏を幕府が討伐するという流れの中で、大内義弘も九州に入り戦うように命じられました。⇨　幕府側は大内軍のおかげで優勢に転じる
- (8) あらぬ噂が流れる。「幕府はその戦乱のなかで大内義弘を殺そうとしている、実は少弐氏と菊地氏によって戦の中で大内討伐をするように命じている」

  ⇨　大内側は幕府に対しての疑念を募らせる
- (9)応永６年、大内義弘が５千の兵を率いて和泉国堺（現・大阪府堺市）に城を築き籠城。　味方の予定は山名氏や土岐氏の他に近江の京極氏や鎌倉公方の足利満兼などでした。
- **(10)**足利満兼は上杉氏に足止めされる等の誤算が重なり、大内義弘の軍は籠城した城で孤立状態となり、巨木を集めて城壁を築き、それに火を放たれてしまいました。
- (11)大内義弘は城の中で自刀（1400年1月）
- (12)大内に賛同した有力守護大名も失脚　⇨　幕府の勢力が強固なものに


応永の乱
（1399年）
大内義弘分国
反義満派の挙兵
宮田時清
土岐詮直
京極秀満
堺篭城戦

明・朝鮮との関係

- 明の外交：　あくまでも「日本国王」との通交しか認めない。

  勘合符で遣明船（勘合貿易で150年の間、19回、その内大内船は7回）

- 朝鮮との通交：　北九州や瀬戸内の海上勢力及び彼らに影響力を及ぼせる有力武家との交渉にも力を注ぐ。
- 大内氏は朝鮮側から室町将軍に次ぐ政治権力と見なされ、対馬の宗氏と並んで重要視された。
- 16世紀になって、対馬の宗氏が通交の独占を図ろうとするものの、それを阻んだのは赤間ヶ関と博多を掌握した大内氏であった。
- 九州の少弐氏の没落後、大内氏と宗氏は協調関係に入った。
- 歴代当主による、朝鮮への使節派遣は約150年間に63回。

応仁の乱

- 応仁元(1467)年から文明9(1477)年までの11年間，管領細川勝元(ほそかわかつもと)の東軍と山名宗全(やまなそうぜん，持豊<もちとよ>)の西軍が戦った内乱。 京都が主戦場となりました。
- 大内政弘は応仁の乱には西軍側の主力として参戦する。
- 政弘上京のおり、領内で内乱：大内道頓の反乱： 政弘の叔父で、細川勝元と通じ、留守を狙い挙兵。

周防守護代の陶弘守は政弘不在にかこつけ大内宗家を乗っ取るなど出来ぬと拒絶。 益田貞兼と道頓を討つ

- この乱の勝者は将軍の地位を得た富子と義尚、管領の地位を独占した細川家である。
- 京都は荒廃し、公家の一部は地方に移った。

主な大内家当主　○

- 大内弘世：　初の守護
- 大内義弘：勢力を強めたために将軍・足利義満に睨まれ堺で討たれる（応永の乱）五重塔は霊を弔うため。
- 大内政弘：応仁の乱で山名宗全と西軍を支える
- 大内義興：追放された将軍・足利義稙（よしたね）に頼られ山口で庇護、後、上洛、将軍再任。力で補佐。
- 大内義隆：尼子氏に敗れたことをキッカケに家中分裂。陶隆房謀反。滅亡

フランシスコ・ザビエル

- 1550年　平戸に入り宣教活動
- 同年　山口に入り、無許可で宣教活動
- 守護大名：大内義隆に謁見
- 全国での宣教の許可を「日本国王」から得るため、インド総督とゴアの司教の親書とともに後奈良天皇および征夷大将軍・足利義輝への拝謁を請願。しかし、献上の品がなかったためかなわなかった。
- 1551年　大内義隆に再謁見　　一行を美服で装い、珍しい文物を義隆に献上した。献上品は、天皇に捧呈しようと用意していたインド総督とゴア司教の親書の他、望遠鏡、洋琴、置時計、ギヤマンの水差し、鏡、眼鏡、書籍、絵画、小銃などであった
- 喜んだ義隆はザビエルに宣教を許可し、信仰の自由を与えた。廃寺となっていた大道寺を住居兼教会として与えた。

宣教師の遺した山口の記録

- イエズス会宣教師　サビエル
- 「日本通信」という名の手紙
- 1550年に山口に来た時、山口は京都に匹敵するほど栄えていた。
- 1551年に大内隆に謁見、布教の許可を貰う。
- 山口を離れる時、山口で洗礼を受けた信徒が500人。最初の教会（大導寺）

- ルイス・フロイス1563年に日本上陸
- 「日本史」という編年体の歴史書を残す。
- 1565年大内氏の滅亡を知った。
- 1568年信長と会見した時、毛利氏と戦っていることを聞いた。
- 1570年に山口を訪問した時、毛利氏支配下でキリスト教が広まっていることに驚く。

西の京　山口　（大内氏最盛期に称えられる）

- 初めて上洛した大内弘世がその情緒豊かなまち並みに感銘を受け、山口に京のまちを再現することを構想しました。（本拠地を国府の置かれた防府から山口に移す）

　元来、山口は京に似た地形であったため京風の市街整備をしやすかった。

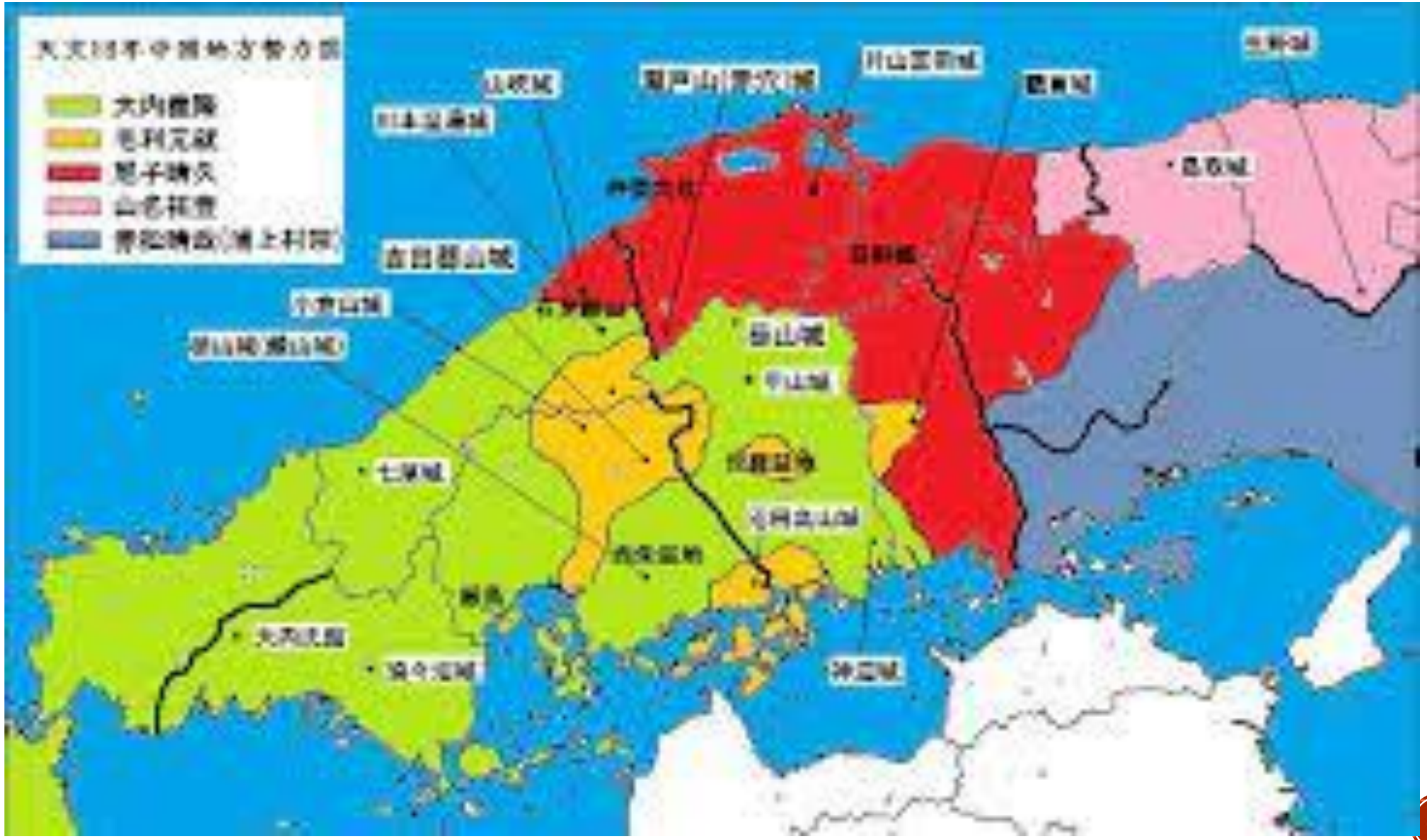
- その後の大内氏は代々山口を整備。
- 応仁の乱等で荒れ果てた京を離れて山口に移る公家が少なくなかった。
- 対明貿易で繁栄し、公家や文化人とも親交の深かった大内氏城下の山口には連歌師宗祗（そうぎ）をはじめ多くの文化人や公家が集まり儒学や和歌などの講義が行われた。
- 水墨画の雪舟や儒学の桂庵玄樹（けいあん げんじゅ）ら、山口に多くの文化人が育った。
- ただし、「西の京」なる言葉はどこにも残っていない。　周防人の誇りか！

大内氏の繁栄　○

- なぜ、勃興したと考えますか。
- なぜ、経済的、軍事的力を長く保持したと考えますか
- （なぜ、突然、滅亡したのでしょう）

尼子氏との衝突　大内義隆

- 新興勢力として尼子氏が大きくなってきた
- 大内義隆は大軍を率いて尼子氏の月山富田城を攻撃　（1542年）
- 時間が掛かり過ぎた事で出雲の国人が離反　⇒　大敗
- この戦いで寵愛していた養嗣子の大内晴持を失う
- 山口に逃げ帰った義隆は、その後、領土的野心や政治的関心を失っていく。
- 以後、家臣の統制が困難となっていった。


大内義隆
毛利元就
尼子晴久
山名祐豊

大寧寺の変

- 天文20年（1551年）8月
- 大内義隆と険悪な関係になった武断派の陶隆房らが謀反の兵をあげる。
- 義隆は一旦北の海に向かい、そこから親族である津和野の吉見正頼を頼ろうとしたが暴風雨のため東に動けず、長門深川の大寧寺にたどり着き立て籠もる。
- 陶軍に攻められ自害。

- 義隆は、家中や領民の動向が見抜けず、公卿的生活を重んじた。中央指向の姿勢を貫くため、国情を無視して臨時課役を増したことが悲劇につながったとされている。

その後の中国地方

- 陶隆房は大友宗麟の異母弟（生母は大内義興の娘で義隆の甥）：大友晴英を担ぎ大内新当主として担ぎ大内義長と改名
- 短い間の平穏
- 津和野の吉見正頼がまず動き、次いで毛利輝元により陶隆房が討たれる（厳島の戦い：　1555年）
- その後の毛利は尼子氏との戦いに突き進む